

中学校社会科における教科書の背景知識と一枚ポートフォリオの導入による授業理解の促進についての一考察

—知識基盤社会を生きる力の育成をめざして—

福谷泰斗*, 皆川直凡**

新学習指導要領では、「基礎・基本的な知識、技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」などを中心に置き、「言語活動」をキーワードとして「生きる力」の育成を目標としている。また、「基礎基本的な知識、技能」については繰り返し学習の徹底などをもとに学習活動を行っていくということ、「思考力・判断力・表現力」については、レポートの作成や論述などを通して言語力を育成し、学習活動を通してその力の向上をめざしていくことを挙げている。

これらの考えに基づいて自らの考えをまとめ、またその思考の過程を客観的に見ることで自己学習を進めることを目的とし、ポートフォリオの開発を行うとともにそれを利用した学習活動と評価活動を行った。

[キーワード：背景知識，ポートフォリオ，自己学習，言語活動，新学習指導要領]

1. はじめに

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であるといわれている。このような知識基盤社会化やグローバル化は、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させる一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力の必要性を増大させている。このような状況において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。そこで本研究では、知識を認知心理学における情報処理の観点からとらえ、社会科における知識を生きた知識として生徒に定着させるための教育研究を行った。

2. 新学習指導要領と教科書との関係

2-1. 社会科における学習指導要領改訂の趣旨

社会科において、答申の趣旨を生かす上で特に留意しなければならないのは、知識基盤社会やグローバル化が進む時代にある今こそ、世界や日本に関する基礎的教養を培い、国際社会に主体的に生き、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することである。そのため、基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得に努めるとともに、思考力・判断力・表現力等を確実にほぐくむため言語活動の充実を図り、社会参画に関する学習

を重視することが必要である。

具体的には、答申の中で、社会科、地理歴史科、公民科の改善の基本方針及び中学校社会科の改善の具体的事項については、次のように示された。

(1) 改善の基本方針

- 社会科、地理歴史科、公民科においては、その課題を踏まえ、小学校、中学校及び高等学校を通じて、社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る。
- 社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力を育成する観点から、各学校段階の特質に応じて、習得すべき知識、概念の明確化を図るとともに、コンピュータなども活用しながら、地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る。
- 我が国及び世界の成り立ちや地域構成、今日の社会経済システム、様々な伝統や文化、宗教についての理解を通して我が国の国土や歴史に対する愛情をはぐくみ、日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現をめざすなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や

* 南あわじ市立辰美中学校

** 鳴門教育大学 大学院 基礎・臨床系教育部

能力を育成することを重視する方向で改善を図る。

(2) 中学校社会科における改善の具体的事項

○小学校社会科の学習を踏まえ、地理的分野、歴史的分野、公民的分野という三分野の構成は維持しながら、我が国や世界の地理や歴史、法や政治、経済等に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を習得し、社会的事象の意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明する学習などを通して、社会的な見方や考え方を養うことを一層重視して改善を図る。また、様々な伝統や文化、宗教に関する学習を重視して改善を図る。

各分野においては、それぞれの特質と相互の関連を考慮しながら、次のような改善を図る。

(ア) 地理的分野については、世界の地理的認識を深めるため、世界各地の人々の生活と環境とのかかわりや世界の諸地域の多様性について学ぶ項目を設けるとともに、我が国の国土に対する認識を一層深めるため、日本の諸地域における特色ある事象をほかの事象と有機的に関連づけて地域的特色をとらえることができるよう内容の改善を図る。また、内容の全体を通して、地図の読図や作図などの地理的技能を身に付けさせることを一層重視するとともに、身近な地域の調査の学習において諸課題を解決し地域の発展に貢献しようとする態度を養うことができるようにする。

(イ) 歴史的分野については、我が国の歴史の大きな流れを理解させ、歴史について考察する力や説明する力を育てるため、各時代の特色や時代の転換にかかわる基本的な内容の定着を図り、課題追求的な学習を重視して改善を図る。その際、現代社会についての理解が深まるよう、近現代の学習を一層重視する。また、例えば身近な地域の歴史学習などの中で、様々な伝統や文化について学習させるとともに、我が国の歴史の背景にある世界の歴史の扱いを充実させる。さらに、諸事象の意味や意義、事象間や地域間の関連などを追及して深く理解し自分の言葉で表現する学習を重視する。

(ウ) 公民的分野については、現代社会の理解を一層ふかめさせるとともに、よりよい社会の形成に参画する資質や能力を育成するため、文化の役割を理解させる学習、ルールや通貨の役割などを通して政治、経済についての見方や考え方の基礎を一層養う学習、納税者としての自覚を養うとともに、持続可能な社会という視点から環境問題や少子高齢社会における社会保障と財政の問題などについて考えさせる学習を重視して内容を構成する。その際、習得した概念を活用して諸事象の意義を解釈させたり事象

間の関連を説明させること、自分の考えを論述させたり、議論などを通してお互いの考えを深めさせたりすることを重視する。

2-2. 改訂前と現行教科書の違い

新学習指導要領に則った現行教科書との違いは、「世界地理」と「日本地理」の構成である。

旧指導要領に則した以前の教科書の内容は、大きく3つから構成されていた。すなわち、第1編「さまざまな地域の成り立ち」第2編「地域を調べる」第3編「世界からみた日本」であった。第1編で世界の地域区分にふれ、第2編では、愛知県・福岡県・大阪府・北海道と沖縄の4つの教材から都道府県の調べ方を、アメリカ・中国・イタリアを例として世界の国の調べ方を学び、第3編で「世界からみた日本」という観点を中心に、「自然」「人口」「資源・産業」「文化」の視点から見た日本という内容で構成されていた。

一方、新学習指導要領に則した現行の教科書の構成は、大きく「世界地理」「日本地理」の2つの観点から構成されているのが特徴である。旧教科書と新教科書の最大の違いは、旧教科書が「世界からみた日本」を中心としていることに対して、新教科書が「世界地理」として世界各地の人々のくらしや、世界の州のようすについて、「アジア州」「ヨーロッパ州」「アフリカ州」「北アメリカ州」「南アメリカ州」「オセアニア州」の6つの州についてそれぞれテーマを設定し、詳細に記述している点、および「日本地理」では「北海道地方」「東北地方」「関東地方」「中部地方」「近畿地方」「中国・四国地方」「九州地方」の地方区分に沿って自然環境や文化、結びつき、産業などをテーマとした内容で構成されている点である。

世界地理の中のアフリカを例としてとりあげると、旧教科書で記載されている内容はわずか1ページの扱いであり、アフリカ州のからエジプト、ナイジェリア、ケニア、南アフリカ共和国が色塗りされた地図が掲載されているのみであった。これに対し、新教科書では8ページに渡って、アフリカ州のようすについて伝統的な文化とその変化、歴史や産業からみた現代のアフリカ、などテーマ別に詳しい記載がみられる。

新学習指導要領ではグローバル化する社会の中で競争と共存を両立すること、また、そのために思考力・判断・表現力・知識、技能の活用が必要とされている。これらの背景から、旧学習指導要領から新学習指導要領への移行に伴い、地理的視野を広げ、また世界地理と日本地理をそれぞれ系統立てて学習していくことで、知識の幅を広げるとともに、それぞれの章ごとに設定されたテーマに則って学習を進めていくことで、思考力や判断力、表現力などを発達させ、また習得した知識や技能を活用す

る能力を高めることを目的としていると考えることができる。

3. 教科書の背景知識についての検討と例示

2で述べたように、学習指導要領の改訂にともない教科書がより系統だった内容へと大きく変化している。特に地理の教科書では「世界地理」と「日本地理」のふたつに大きく分けられており、それぞれの内容も大幅に増加している。これらの教科書に記載されている内容を理解するためにはその背景となる知識（以下、背景知識と記す）が非常に重要であるといえる。また、実際に授業を行うにあたって、生徒の理解を促進するためには、教科書に記載されている事象の背景にある社会的事実などについても把握し、教材化することが必要であると考えられる。

先にも述べたように、旧学習指導要領と比較すると、新学習指導要領に基づいた現行教科書では、世界地理・日本地理の2つに分けられているのが大きな特徴である。

具体例としては、アフリカ州の取り扱いが大きくなっているということ、各学習課題の中で環境問題が大きく取り扱われていること、日本地理の範囲が北海道地方、東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方、中国・四国地方、九州地方の七地方区分全てを地理的特徴からとらえていることなどがあげられる。

3-1. アフリカ州についての理解を深めるための背景知識

まず、アフリカ州について、旧教科書と現行教科書の違いを下に記すとともに、アフリカ州についての理解を深めるための背景知識を述べる。

旧教科書では、1ページの扱いであったものが、現行教科書では、①アフリカ州の姿②伝統的な文化とその変化③歴史や産業から見た現代のアフリカ州とまとめの合計8ページである。

アフリカ州についての理解を深めるための背景知識の一例として、アフリカ州の地理についての授業の背景知識を以下に記す。

【アフリカの民族問題—ツチ族とフツ族の対立、ルワンダのジェノサイドを例に—】

関連用語 ○民族問題 ルワンダ ベルギー ツチ族
フツ族 ジェノサイド（大量虐殺）

ツチ族とフツ族はもともとの民族的な境界が曖昧であり、明確な対立はなかったが、ベルギーをはじめとする白人による植民地支配が始まると鼻の大きさや肌の色合いなどを基準に境界が作られ、ツチ族は「高貴」でありフツ族は「野蛮」であるという概念が広まった。

植民地支配の道具としてツチの支配が形成され、フツ

族はあらゆる面で差別を受けた。1962年のルワンダ独立を前にツチ族と宗主国のベルギーとの関係が悪化し、ベルギー当局はフツ族による体制の転覆を支援した。この結果、多くのツチは近隣諸国へと逃亡、特に隣国のウガンダに逃れたツチ系難民はルワンダ愛国戦線を組織し、内戦が勃発した。1993年には和平合意に至ったものの、1994年フツの大統領が何者かに撃墜された（フツの過激派の犯行説・ツチの犯行説）ことによってフツによるツチの大量虐殺が始まった。

3-2. アジア州についての理解を深めるための背景知識

次に、アジア州の特徴について旧教科書と現行教科書の違いについて述べる。

アジア州の学習について旧教科書では中華人民共和国を例に挙げ、その学習を進めることを中心としていたが、現行教科書では中国以外にも東アジア、東南アジア、南アジア諸国について、多様な民族が生活を営んでいること、文化や宗教的な観点、経済発展と環境問題など多面的・多角的な視点から学習活動を行っていくように構成されている。

特に現行教科書では環境問題についての記述が多いことから、アジア州についての理解を深めるための背景知識の例として、フィリピンが直面する経済発展とそれに伴う環境問題についての背景知識を以下に示す。

【発展途上国の大都市のくらし—フィリピンのスモーカーマウンテンを例に—】

関連用語 ○スラム フィリピン

スモーカーマウンテン

フィリピンのマニラ市北方に位置するスラム街「スモーカーマウンテン」。かつては海岸線に面した一漁村であったが、1954年に焼却されないゴミの投棄場になった。それ以来からマニラ市内（マニラ首都圏）で出たゴミが大量に運び込まれ、ゴミの中から廃品回収を行い僅かな日銭を稼ぐ貧民が住みつき急速にスラム化した。1980年代頃から、フィリピンの貧困の象徴として扱われるようになった。政府は、国のイメージが損なわれることを理由に閉鎖を決断。住民は、公共住宅をあてがわれ強制退去させられたが、一部の住民はスモーカー・バレーをはじめとする別の処分場周辺に移り住み、従来通りの生活が行われている。

4. ポートフォリオの意義の検討と開発

4-1. ポートフォリオの意義

これまで述べてきたように、学習指導要領が大きく改訂されたことに伴って、教科書の内容も大きく変化している。また、新学習指導要領では、地域の特色や変容、

歴史的な事象についてなど、学習したことについて考えることを重視するとともに、地図や資料を活用して表現したり、事象間の関連を互いに説明したりするなどの言語活動を重要視している。知識基盤社会を生きるためには、知識を効果的に獲得することに加え、自ら表現し、他者に伝える力の育成が求められているのである。

これらの過程を踏まえ、生徒が既習事項について表現し説明するといった言語能力を高め、また生徒自身が何がわかっていて、なにがわかっていないのか、子どもが学習を通してどのように変容したのか、を的確に把握するためにポートフォリオを作成し、実施することとした。

ポートフォリオの特徴は、授業者のねらいとするものを、学習者が1枚のシートの中に学習内容を記録していくことで、学習による知識の変容を学習者自身が可視化、構造化する形で自覚でき、その変容から学ぶ意味を感じ取ることができることにある。また、授業者はそれを見て授業評価に活用することができるという利点もある。

4-2. ポートフォリオの開発

新学習指導要領では、「基礎・基本的な知識、技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」などを中心に置き、「言語活動」をキーワードとして「生きる力」の育成を目標としている。「基礎基本的な知識、技能」については繰り返し学習の徹底などをもとに学習活動を行っていくということ、また、「思考力・判断力・表現力」については、レポートの作成や論述などを言語力の育成、活用を意識した学習活動を通してその力の向上を挙げている。

『各教科等の指導にあたっては、生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること』(中学校学習指導要領解説総則編)

先に述べた課題を解決するために、「教える」「考えさせる」の両方を重視した授業方法の開発が必要であると考え、市川(2008)を参考に「教えて考えさせる」授業の考え方を取り入れた授業実践を目的として中学校社会科(地理)の学習指導案を作成し授業を行った(皆川・福谷, 2010)。

この結果、授業実践を繰り返す中で生徒に「考えさせる」ためには、生徒自身が「何を」「どの程度」理解しているかを把握し、そのうえで「考える」ことによって理解を深めていくことが重要であるということがわかった。これらの知見から、生徒が学習したことをまとめることで学習過程の可視化と構造化が重要な意味をもつと考え、堀(2006)を参考に「一枚ポートフォリオ評価(OPPA:

One Page Portfolio Assessment ; 以下, OPPA と略記)」(なお, シートを利用した評価をOPPA, 評価するためのシートをOPPとする。)を使用した授業実践を通して、指導と評価の一体化を目標としたOPPシートを作成し、社会科(歴史)の授業において改善を加えながら使用し、評価の基準とその方法を考案した(皆川・福谷, 2011)。OPPAとは教師のねらいとする学習の成果を、学習者が1枚のシートのなかに、学習前・学習中・学習後の学習履歴として記録し、それによって自己評価させるものであり、これによって生徒自身は学習による変容を学習者自身が記入した学習事項に対する具体的な記入内容を通して可視的かつ構造化された形で自覚することができるものである(堀, 2006)。

実際に勤務校の生徒の実態に即したOPPAの開発を行うにあたっては、これまでの取り組みを踏まえた上で、皆川・福谷で議論を重ね、「①生徒にとっても教師にとっても、学習した内容が一目瞭然であること。」「②生徒自身が自分で記入したOPPを見て、授業に対する理解度や学習内容を把握できること。」「③教師が生徒のOPPを見て個々の生徒の問題点を見出すことができること。」「④教師は生徒がOPPに記入したことを観察、評価することでそれぞれの理解度に応じた指導方法を探り、助言内容を考えるということ。」を目標とした。

試行錯誤を繰り返す中で「授業者は何をわからせたいのか。」という授業の目的を明確にし、実際に生徒が理解できているか、学習したことを通して考えを深めることができているか、を把握するために「①生徒が単元を学習する前に既存の知識として、どんなことを知っているのか。」「②その既存知識はどこで知ったのか。」ということを学習前に記入した上で、学習した内容をまとめた文章や記入内容が授業の目的とどの程度一致しているかを把握するための記入欄を設定することが重要な意味をもつということが明らかとなった。

そのため、歴史の授業での使用にあたってOPPの中で各単元の導入部分の問いかけについては「○○について、知っていることを書きましょう。」という発問で統一することとした。(○○の部分には、単元の中の小項目が入る。例. 建武の新政, 南北朝の内乱など。)

また、それ以降の空欄には、それぞれ授業を経てわかったことを具体的に書くようにし、その単元の学習の最後には、授業の感想や参加度、興味・関心を測るための生徒記入欄を設定した。

中学1年生・2年生を対象とした授業を行い、授業のまとめとしてB4サイズのポートフォリオ用紙を用いて生徒が学習活動を通して考えたことやまとめたことを記入する時間を設定した。生徒が記入したOPPの評価については、「①要点をとらえ、取捨選択して書いているか。」

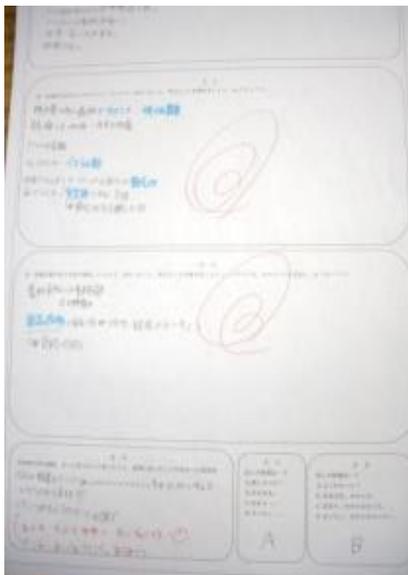
「②視覚的にわかりやすく記入しているか。」「学習したことを自分なりにより深めた内容となっているか。」を基準とした。

5. 背景知識とOPPを利用した授業の例

これまでに試行錯誤しながら開発してきた一枚ポートフォリオ (One Page Portfolio) を利用し、背景知識を実際の教育活動で取り入れながら授業を行った。授業内容とねらいについて、背景知識との関連を以下に述べる。

アフリカ州の地理についての学習では、「歴史や産業からみた現代のアフリカ州」というテーマが設定されており、「植民地化の影響と民主化の課題」「モノカルチャー経済」「豊かな自然環境と環境問題」の3項目によって構成されている。これらの3項目は互いに関連しているが、教科書の内容から中学生がその関連性を認識し、アフリカ州が現在直面している課題の背景にある社会的事象について考えを深めること難しい。そこで、授業の内容をより深く理解するために先に述べたアフリカの民族問題についての背景知識を生徒に説明しながら、授業を行い、学習活動を通してわかったことや疑問に思ったこと、生徒個人の感想などを一枚ポートフォリオにまとめさせた。生徒たちが授業で作成したポートフォリオの中から2つの例を示し、それぞれの特徴について考察する。

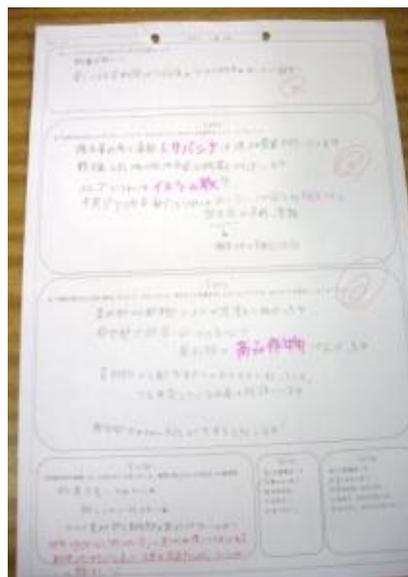
(1) 生徒Aが作成したポートフォリオの例



この生徒は授業を行う前は「アフリカについて知っていることは？」という質問に対して「知っていることは特にない。」という内容の記述をしていたが、背景知識を利用したことで文章で学習したことをまとめることができるようになっている。またアフリカ州の地

理についての学習活動を興味の深まりの視点からとらえる問題について「おもしろかった。」「まあまあ、おもしろかった。」「あまり、おもしろくなかった。」「おもしろくなかった。」のA~Dの四段階評価では最高点のAをつけており、理解の深まりの視点からとらえる問題については「よくわかった。」「まあまあ、わかった。」「あまり、わからなかった。」「わからなかった。」の四段階評価では次点のBをつけていたことから、この生徒については背景知識を用いた学習活動を行うことで一定の効果が得られたと考えられる。

(2) 生徒Bが作成したポートフォリオの例



この生徒は「商品作物」という語句についてまとめを行っており、アフリカの宗教や気候などについてもアフリカ大陸の中での分布や特徴について文章でまとめることができている。特にサバンナやイスラム教、商品作物といった中学校社会科における重要語句についても色分けして視覚的にも印象に残るように記述していることが特徴であるといえる。また、この生徒は興味・関心を測る四段階評価、理解の深まりを測る四段階評価ともAをつけるなど、学習内容について肯定的な考えをもつことができたと考えられる。

6. 本研究のまとめと今後の展望

取り組みを続けることで、生徒自身がシートに書きこむ量も少しずつ増え、またその質も向上している。

具体的には一枚ポートフォリオの取り組みを始めたころは簡条書きや、授業中にとったノートをそのままポートフォリオ用紙に写すことが多く、書き方も鉛筆のみの利用であったが、取り組みの回数を重ねていくことを通して、少しずつ文章でまとめたり、簡条書きだけでなく自分の考えや感想、社会的問題への気づきや疑問などに

についても書くことができるようになってきている。

これらのことから、一枚ポートフォリオを学習活動で取り入れ、授業で学んだことや自分の考えを文章化するという言語活動を継続していくことで、生徒の理解を深めるとともに、レポートなどをまとめたり他者にわかりやすく伝えるための社会的思考力や言語能力を高めることができると考えられる。

これまでの取り組み(皆川・福谷, 2010, 2011)から、「教えて考える授業」やそのための教材(OPP)の開発とそれを用いた実践活動では、一定の効果が見られた。

具体的には、授業前に教科書で習うことについて生徒がどの程度の予備知識をもっているかを調べることで、生徒の知識の有無を把握するとともに、生徒自身も自分自身がどこまで知っているかを認知することができるということが挙げられる。また、背景知識を授業の中で活用することで、教科書に記載されている社会的事象をより深く理解したり、興味・関心を高めたりすることができた。加えて、学習した内容についてポートフォリオ用紙に自分の考えや重要語句などを記入していく過程で、生徒自身が「社会科の学習活動を通して、自分の知識が増えている。」「自分がどこまで理解しているか。」「自分がどの程度、学習したことを言語化、文章化することができているのか。」ということを実感することができたということがいえる。

また、生徒がポートフォリオ用紙に記入している内容から、背景知識を取り入れた学習活動を通して学んだことや考えたこと、疑問に思ったことなどをポートフォリオ用紙に記入していくという体験を重ねていくことで、生徒自身の言語能力が少しずつ高まっているということが考えられる。

これらのことから、現行教科書に記載されていることを「基礎・基本」として教えるとともに、学習内容をより深く理解するために、その背景にある社会的事実を背景知識(情報)として教え、考えるための手段とし、考えたことを一枚ポートフォリオにまとめ、記入することで言語力や思考力が向上していくということが言える。

また、背景知識を利用することで、それまでイメージすることが難しかった教科書の内容が具体的にイメージすることができるようになり、その結果学習内容に対する理解を深めることになるだけでなく、生徒が自らの学習内容や課題に対する興味や関心を高めることにもつながっていると言える。

以上に述べたことは、生徒のポートフォリオ用紙の記述欄で、授業前では知っていることがない、書けることがない状態であったり、学習内容に対してあからさまに興味・関心がない状態にある生徒が、授業を行った後や学習内容をまとめる時に記入したポートフォリオ用紙に

は、肯定的な感想を記入したり、新たな疑問などを書いていることなどからも明らかである。

今後はOPPAのさらなる改善に加えて、教科書の背景にある社会的な事実を利用して生徒の理解を深めること、社会科における基礎・基本的な知識を教えるとともに、背景知識を用いた学習活動を行うことで生徒の興味・関心をより高めていくこと、また、生徒が学習した内容、取り入れた知識や社会的情報を用いてより高次のレベルで社会的な課題を考えていくこと、そして自らの考えを書くことを通してまとめたり、さらなる疑問や課題を発見したりすることを通して言語力や課題解決能力などを高め総合的な学力や「生きる力」を育成していくことなどが課題である。

背景知識と一枚ポートフォリオ、そして一枚ポートフォリオを活用した指導と評価の一体化を利用したより実践的な「教えて考えさせる授業」を目指していきたい。

現在はこれらの研究を継続するとともに、生徒の授業への理解を深めること、社会科の学習を通して社会的事実への興味関心を高めること、生徒の言語能力を高めること、問題解決能力を身につけさせることを目標として、新学習指導要領に基づいた現行の教科書の背景にある事実や知識を学習活動の中に取り入れる具体的な方法についての研究に取り組むとともに、これらの一連の学習活動や「教えて考えさせる授業」を有効に活用する方法についても検討しているところである。

中学校社会科における学習をとおして、生徒が将来、知識基盤社会やグローバル社会を生き抜くための基礎力を身につけることができるようにするという観点から、有用な背景知識とポートフォリオの検討と改善を継続することがわれわれの使命であると考えている。

引用文献

- 堀 哲夫(2006). 一枚ポートフォリオ評価 中学校編 日本標準.
- 市川伸一(2008). 教えて考えさせる授業を創る 図書文化
- 皆川直凡・福谷泰斗(2010). 教えて考えさせる授業についての心理学的検討—中学校1学年社会科(地理)の学習指導案の作成— 鳴門教育大学授業実践研究, 9, 21-27.
- 皆川直凡・福谷泰斗(2011). 一枚ポートフォリオ評価による学習過程の可視化と構造化—中学校1学年社会科(歴史)における実践— 鳴門教育大学授業実践研究, 10, 29-35.